

6月は北海道で一番の季節と言われています。雪解けが済み梅雨のない冷涼な時期。特にこれといった名物はこの時期ないのですが、森の新緑をバックに茶色だった畑にも作物たちの緑が力強く染めていきます。富良野プリンスホテルの周辺はスイカの産地で、傾斜地の畑にスイカのトンネルが筋になってうめています。まだこの時期では朝晩冷えるので支柱にビニールをかけて栽培することをトンネル栽培と言います。ホテルからチーズ工房を抜けて下地に来て見るとそこは富良野のたまねぎの発祥地。畑一面にたまねぎが植え付けられ、今頃は20センチほどトンガツ葉っぱを天に向けています。私どもの農園へ南に向かってみると田んぼに稲も。当地では「ほしのゆめ」「きらら 397」という品種が主流です。昔から四里四方で採れたものを食べていけば間違いないと聞きますが、中途の住人ながら郷土愛も手伝ってか地元のお米は美味しいですね。

「世界にひとつだけの花」・・・ご存知スマップのヒット曲。メロンの整枝作業中ラジオから流れていたこの曲にまつわる話を。

道内のある小学校の運動会。小児麻痺によって手足に障害をもつ子のお母さんからの手紙でした。徒競走でわが子の順番がきて皆に置いておかれながら賢明に走る姿に、隣で家族のおばさんらしきご婦人の一言・・・「あらー、あの子可哀想に。あんたもいい子にしていなとあんなになっちゃうよ！」・・・走る子供のお母さんは胸が押しつぶされる思いだった。すぐ傍にその子の母親がいるとは思っても口にしてしまったのだらうけれど、そんな見方でしか他人を見られない感覚に情けないやら、腹が立ち、お母さんの気持ちはどんなだったろう。お母さんは傷心の思いを相手に訴えるわけではなく、懸命に走るわが子にこの曲の意味を見出していたのだらうと思います。ラジオからそんな手紙が読まれ曲がかかりました。・・・ナンバーワンにならなくてもいい。・・・一人一人違う種を咲かせることに一生懸命なれればいい。・・・涙が出そうになりました。それぞれがいろいろな思いでこの曲を聴いている。名曲ですね。

この通信も第一号1992年7月以来、**26号**となりました。そのつど思い付きの話、あとで読み返してみるといつも凹んでいます。それでもこれは農産物とともにお送りしたい私どもの思いです。前もって書いておけば楽なのですがご承知の通り季節感の変化が甚だ激しい富良野では書いて季節の実感がライブでないと持てません。従って毎回毎回追まられるようにしてパソコンに向かっています。お中元の需要を見込めばもっと早くDMを送らせていただかなければならないのに、メロンの大事な作業が立て込んでようやく少しだけ余裕ができた今頃、慌てて思いつきで、行き当たりばったりで。いつもながら計画性がないのは血液型と生まれた星座のためでしょうか。

富良野市・・・前回お恥ずかしながらある小雑誌に載った手前の話題を引用しました。

北海道ふるさと新書/北海道新聞社 富良野市・・・もうひとつの「北の国から」がそれですが、倉本聰のインタビューや森の話など読み物としても面白いのでよかつたら買って読んでみてください。そのなかからまた少しばかりご紹介。

富良野市 西に夕張山系芦別岳、東は十勝連峰に囲まれた富良野盆地に市街が広がっています。総面積 600.82 平方キロメートル。四角にしてみるとおおよそ 25km×25kmの広さ。富良野と名のつく町は他に北から「上富良野町・中富良野町・富良野市・南富良野町」とあります。地元では「ふらの」といえば「富良野市」を指し、他はそれぞれ「かみふ」「なかふ」「なんふ」と呼んでいます。

いまや富良野といえば「ラベンダー」と「北の国から」ですが、そもそも「ラベンダー」もドラマで紹介され全国区になりました。富良野の話をするのにこのドラマは避けて通れないほど。2002年9月の「2002 遺言」をもって最終回を迎えたわけですが、放送開始が1981年の連続ドラマから。以来21年間——。富良野市は2003年開庁100年を向かえた。その100年のうち実に五分の一の年月を「北の国から」とともに歩んできた。年間200万人以上の観光客と倉本先生が播いた種が芽吹き、咲かせた花が富良野のまちを変えた。過疎のまちはあのドラマによって変貌していきました。——「昔はね、フラノって読める人さえなかなかいなかった。トミヨシノとか。富良野の高校生が修学旅行行って「フリヨウノ高校」って言われた。」——ドラマで地井武男演ずる「中畑和夫」のモデルとなった仲世古さんは実際の「麓郷木材工業」の社長さんです。実は我々も東京から富良野にやってきた当座大変お世話になった方。倉本先生の「北の人名録」(新潮社)にも書かれています。この本、絶対お勧め。富良野に住みたいと思った一番のきっかけがこの本だったのです。こんな独特のユーモアを持った人たちのいるところに住みたいといっぺんで夢中になった。

先生の職業はライターだと聞くと「ライターの販売人」だと勘違いする。素人劇団を立ち上げて中央では巨匠級の先生に台本を書けと迫る。「バカ云え、台本作りにひと月はかかる」と言えば「なァンも、先生なら三日でできる？ やればできる？ プロならできる？ 心配いらネ？」と言い放つ。——とにか面白。上質のユーモア小説のようだという人も居ます。

ドラマでは市街地から20km離れた麓郷を実名で紹介した。ドラマを書くにあたって先に先生は「実名をあげると知床ブームのように人が押しかけて地元で迷惑がかかるかもしれない。架空の地名でもかまわないけれど地元ではどうだろうか？」ところが地元では「こんなとこに観光客なんてくるはずないべや」「なんもだ、人が少なくて寂しくてしょうがないから、どんどん人が来るようにしてくれ。」って。

ドラマの成功で倉本先生のもとに富良野で暮らしたい、シナリオの勉強がしたい、俳優になりたいといった若者たちから手紙が寄せられたり直接たずねてくるものがでてきた。そんな若者にしてやれることはないかと脚本家・俳優の養成をめざす私塾「富良野塾」が開設されました。2年間授業料・入塾料は一切とらない。その代わりに生活費は塾生たちが夏の間、農作業で稼ぎだす。2年間学んだ末その道で生きられる保証はない。一部でテレビドラマの脚本家となったり、劇団で活躍する者もいるが一方で、なかなかひとり立ちできず富良野に舞い戻ってくる塾生たちもいる。しだいにテレビドラマから演劇活動へと塾OBたちと芝居づくりに取り組むようになった。40人あまりの塾OBが富良野に定着してまちに新しい風をもたらしている。

富良野には倉本聰がいて、富良野塾があり、塾OBがつくる劇団もある。こうした環境をまちづくりに生かそうと2000年10月、「富良野演劇工場」が建てられました。その運営はNPO法人の「ふらの演劇工房」が行い、工房理事たちが市民を代表してボランティア（無報酬）で運営している。もちろん市民の劇場なので市民が気軽に演劇を学べる教室や映画上映、コンサート・トークショーなど開かれています。富良野塾はフランチャイズ制（東京ドームと読売巨人軍との関係）によって公演を行っています。富良野においでの方折に何か公演していたら是非いらしてください。ありきたりの観光地をめぐるよりも良い思い出となりますよ。

富良野の流儀—林道の大岩

倉本先生は家の上の林道に大きな岩が顔をだして、それがどうしても動かせなかった。そこで遊びに来ていた富良野の一人に「あなたならどうする？」と訊いてみた。そしたら、まず、まわりをスコップで掘ると。それで二本の丸太をテコにして動かせば、一日に5センチくらいは動くんでないかい、って言うわけ。で、「十日もあれば、1メートルは動くべさ」ってきた——これが倉本にはショックだった。自分の感覚では一日5センチってことは、もう「動かない」って思ってしまう範疇（はんちゆう）だから。すぐにお金を払って人に依頼しますよね。つまり、自分で動かそうということを放棄する。だけど、彼らはそれを放棄しないということ。そういう、もの考え方が、いまだにこっちはあるのかと思っちゃったですね—。

ドラマにも登場しましたが、五郎さんが井戸を掘る話が出てきますけど、開拓当時を知る古老の方から聞いた実話だそうです。昔、農家が開拓に入ったときには、まず井戸を掘るそうで、で、岩盤にぶつかると、鑿（たがね）で岩をコツコツ砕く。2年くらいかけてようやく17メートルくらい掘ったんだけど水が出ない。地中17メートルっていうと湿度があって暗いし、頭がおかしくなるほどの静粛の世界だそうです。「もうダメだろう」って諦めかけたならなんかサラサラと水の音がする。空耳かなとおもって、足元を見たら石ころが濡れている。それでようやく水を発見する。——そういう話に文句なく感動しちゃう。ことごとく、「脳内革命」をさせられたそうです。

私の場合はこんな経験談を先に文章などで知り、その上で富良野にあこがれ飛び込んできたので、感動して脳内革命まで至りませんでした。が、似たような感動はいつもしています。なるべくお金を使わずその分知恵を出す。昔と違って今はお金さえ出せば大概のトラブルは解消できます。払うお金がなかったり、頼もうにも頼める人がいないなら自分でするしかなかったのですね。厳しくて辛い経験をしてこられた先人たちには心から敬意を感じます。こうした大先輩には比べものになりませんが、農家はたくさん仕事があります。家の水道は自分でユンボ借りてきて配管します。メロンには温水ボイラーのパイプ配管、電気配線。農機具のエンジンなら分解修理。などなどセミプロくらいの技術を持たなければ仕事になりません。自分に少しだけですがそんなノウハウが蓄えられていくようで、それがとてもうれしいことなのです。人間として、男として大概のことは自分でやるってカッコイイでしょう？！ そんなカッコイイ男がこころにはたくさんいますよ。それも割りと動物的な直感をもつ。結構今の時代なら一度楽な思いをしたら、後戻りできませんから、こんな男どもは貴重かもしれませんね。えー、やっぱりイケメンのほうが良いって！ それともコン様かな。

今回は「北の国から」の裏話、演劇のまち 富良野の紹介などで枚数が終わりそうです。

このテーマ、やっぱり思いつきですが、富良野に暮らし始めて12年、この頃富良野のいやな面ばかりに目が向きかけていたのを「やっぱり、富良野が好きだ。」と初心に帰らせてくれました。ドラマを生んだ人間性、厳しいけれど農業で食わしてくれる自然、すばらしいものがあって我々は暮らしていける。常に安定しない天候と農産物価格に翻弄されながらもがんばっていきける。

昔、男たちは土の匂いかした 昔、男たちは汗の匂いかした 昔、男たちは枯草の匂いかした 昔、男たちは焚火の匂いかした

昔、男たちは太陽の下にいた 昔、男たちは力持ちだった 昔、男たちは自分の意見を持った
昔、男たちは大声で笑った 昔、男たちは神様を畏れた

昔、男たちはロビンソン・クルーソー 昔、男たちは老いてもトム・ソーヤ 昔、男たちはいたずら好きの少年

今、男たちは若くて老成し 今、男たちはコロンの匂いをさせ 今、男たちは自分の意見を持たず 今、男たちは筋力を失い
今、男たちは汗を嫌悪し できるだけ動かず 自分のエネルギーの消耗を恐れ その分他のエネルギーに頼り
ボタン一つで快適な温度、快適な環境に身を置くことが豊かさであると錯覚している

僕は 枯草の匂いをさせていたい

(左岸より/倉本聰 冒頭より 理論社)